

## 【特別企画】

# 国際日本語ディベート合宿講座・大会の 振り返り

上土井 宏太（鹿児島大学） 諏訪 昭宏（釜山外国語大学校）

上條 純恵（国立陽明交通大学） 張 小英（惠州学院）

井上 奈良彦（九州大学）

### Reflections on the International Japanese Debate Camp

JODAI Kota (Kagoshima University), SUWA Akihiro (Busan University of Foreign Studies), KAMIJO Sumi (National Chiao Tung University),  
XIAOYING Zhang (Huizhou University), INOUE Narahiko (Kyushu University)

Collaborating among coaches, teachers and students, we intend to reflect on the experiences and outcomes of the International Japanese Debate Camp, focusing on its content, participants' perceptions, and future challenges. The camp, held annually since 2012 at the Kuju Joint Training Center for National Universities in Kyushu, also known as Yamanoie, brings together participants from Japan, Korea, China, and Taiwan. We have engaged in Japanese debate training while promoting international exchange. Here, we provide details and our thoughts of the program, attempting to contribute to the development of debate education.

**Key words:** Japanese debate, debate camp, international exchange, critical thinking

*Debate and Argumentation Education: The Journal of the International Society for Teaching Debate*  
2025, Vol.7, pp. 73-86.

#### 1. はじめに

本稿の目的は、ディベート教育国際研究会及び日本ディベート協会九州支部が主催とな  
って開催している国際日本語ディベート合宿講座・大会（以下、「本講座」）について、その

内容や課題、今後の展望について報告することである。ディベートに関するセミナーは教育機関や民間企業において数多く行われているものの、合宿形式でのセミナーは数が少なく、これまで報告も限られていた。日本語ディベート関連の集中講座の先行事例として、上條（2017）が台湾で行った日本語ディベート合宿があるものの、日本において宿泊を伴う合宿形式で比較的長期間（5 日間）に渡って行うディベート講座は珍しい。英語ディベートでは、アメリカのディベートキャンプを参考に、九州大学における集中講義（学外者のみ宿泊参加）が 2009 年に行われ（九州大学言語文化研究院, 2009）、井上はそれをモデルに日本語ディベートの集中講義の骨格を考案した（井上, 2012; ディベート教育国際研究会, 2015; Lain et al., 2019; Zompetti, 2020）。合宿形式でお互いに学びを深めることは教育効果の観点からも有意義であると考えられ、隅田ほか（2022）は先端科学について国際協働学習を目的とした合宿形式のキャンプを行い、参加した日本人、外国人ともに科学力、国際交流力が高まったと感じていると報告しており、一定期間でのキャンプ形式での学びが効果的であるとの示唆が得られている。

本稿では、2024 年 8 月 20 日（火）から 24 日（土）にかけて行われた第 13 回の本講座の内容を中心に報告する。例年通り、日本、韓国、中国、台湾など複数の国や地域から教員、学生が集まり、九重共同研修所及び山の家（大分県玖珠郡九重町）で行われた。

本講座は 2012 年に第 1 回の講座を九州大学伊都キャンパスで開催し、その後、第 3 回の講座から九重共同研修所及び山の家に会場を移して毎年 8 月に開催している。現在の本講座では、国内外からの参加者をなるべく複数の国・地域の学生が混ざるように 4～5 人程度のチームに分け、日本語準備型ディベートに関する講義を行った後、立論の作成等の試合の準備、大会を主な内容としている。第 1 回から第 13 回までの会場と論題、講師は表 1 に示す通りである。なお、この報告においては、章や節のタイトルの後ろに括弧書きで名前が入っている箇所は各著者が執筆を行い、それ以外の箇所は上土井が執筆を行った。

表 1. 第 1 回から第 13 回までの本講座の会場・論題・講師

|                            | 会場               | 論題                               | 講師（所属は当時）                             |
|----------------------------|------------------|----------------------------------|---------------------------------------|
| 第 1 回<br>(2012)<br>8/6~8   | 九州大学伊都<br>キャンパス  | 日本は死刑制度を廃止すべき<br>ある。             | 加治 良光（全国教室<br>ディベート連盟）・蓮見<br>二郎（九州大学） |
| 第 2 回<br>(2013)<br>8/8~11  | 九州大学伊都<br>キャンパス  | 日本は死刑制度を廃止すべき<br>ある。             | 加治 良光（全国教室<br>ディベート連盟）・蓮見<br>二郎（九州大学） |
| 第 3 回<br>(2014)<br>8/18~21 | 九重共同研修所<br>及び山の家 | 日本は外国人労働者受け入れを<br>拡大すべきである。是か非か。 | 寛 一彦（東京大学）                            |
| 第 4 回                      | 九重共同研修所          | 日本は捕鯨を禁止すべきである。                  | 久保 健治（神田外語                            |

|                             |                  |                                         |                             |
|-----------------------------|------------------|-----------------------------------------|-----------------------------|
| (2015)<br>8/24~28           | 及び山の家            | 是か非か。                                   | 大学)                         |
| 第 5 回<br>(2016)<br>8/22~26  | 九重共同研修所<br>及び山の家 | 日本は救急車の使用を有料化すべきである。是か非か。               | 蓮見 二郎 (九州大学)・久保 健治 (神田外語大学) |
| 第 6 回<br>(2017)<br>8/21~25  | 九重共同研修所<br>及び山の家 | 日本は救急車の使用を有料化すべきである。是か非か。               | 田島 慎朗 (神田外語大学)              |
| 第 7 回<br>(2018)<br>8/15~19  | 九重共同研修所<br>及び山の家 | 日本は飲食店にドギーバッグの常備を義務づけるべきである。            | 是澤 克哉 (広島修道大学)              |
| 第 8 回<br>(2019)<br>8/28~9/1 | 九重共同研修所<br>及び山の家 | 日本はタクシーに関する規制を大幅に緩和すべきである。              | 是澤 克哉 (広島修道大学)              |
| 第 9 回<br>(2020)<br>8/23~30  | オンライン            | 日本は東京オリンピック・パラリンピックを中止すべきである。是か非か。      | 是澤 克哉 (広島修道大学)              |
| 第 10 回<br>(2021)<br>8/22~29 | オンライン            | 日本はすべての公立の中学校・高等学校における校則を全廃すべきである。是か非か。 | 是澤 克哉 (広島修道大学)              |
| 第 11 回<br>(2022)<br>8/21~28 | オンライン            | 日本は定年制を廃止すべきである。是か非か。                   | 是澤 克哉 (広島修道大学)              |
| 第 12 回<br>(2023)<br>8/23~27 | 九重共同研修所<br>及び山の家 | 日本は小学校、中学校、高等学校の全ての宿題を禁止すべきである。是か非か。    | 上土井 宏太 (鹿児島大学)              |
| 第 13 回<br>(2024)<br>8/20~24 | 九重共同研修所<br>及び山の家 | 日本は全ての原子力発電所を廃止すべきである。是か非か。             | 上土井 宏太 (鹿児島大学)              |

(注) 第 9 回～第 11 回の日程は事前のオンデマンド講義等を含んでいる。

## 2. 本講座の内容

本講座の目的は、ディベートを通して語学としての日本語を学ぶこと、ディベートによって培われる論理的な物事の考え方を学ぶこと、様々な国・地域の学生と交流を深めることなど多岐に渡る。さらに、本講座に参加する学生は、ディベート経験がある人もいれば全くディベート経験がない学生も含まれるため、ディベート経験がなくても問題なく講座に参加

することができるように設計されている。具体例として、2024 年（第 13 回）の本講座のスケジュールを表 2 に示す。

1 日目は、日本人、外国人を含めた全ての学生・教員が博多駅（福岡市）に集合し、貸し切りバスで合宿地である九重共同研修所・山の家に向かった。なお、九重共同研修所と山の家は隣接する施設であり、本講座では九重共同研修所で講義や食事を行い、山の家に宿泊をした<sup>1</sup>。到着後は本講座の目的やスケジュールを説明する開会式の後、アイスブレイクとして日本人学生が企画したビンゴゲームを行った。このビンゴゲームは通常と異なり、それぞれのマスに何かしらの条件（例えば、「自転車を使って通学している人」）が書いてあり、それに該当する人を見つけてサインをもらうことでマスを埋めることができる形式とした。これにより参加者との会話が生まれ、アイスブレイクとしての効果を高めることができた。その後、立論の作り方や判定の出し方などのディベートに関する基本的な講義を行った。

2 日目は、午前中に証拠資料の探し方に関する講義を行った後、グループごとに論題に関するメリット・デメリットを考え、立論を作成するグループワークを行った。午後は、反論の方法に関する講義を行った後、引き続きグループワークを行った。グループワークの際には、講師及び引率教員が各チームの進捗状況について確認を行い、作業が進んでいないグループについては適宜助言を与えた。グループワーク終了後は夕食としてバーベキュー及び学生が企画した交流活動を行い、参加者間の親睦を深めた。交流活動は併設されている体育館で人間列車（じゃんけんをして負けた人がその人の後ろについていく活動）を行った。公式の活動自体は 21:00 に終了したものの、多くのチームは夜中まで立論作成の作業を続けていた。これは、2024 年の本講座で初めて各チームの立論を提出する期限を 3 日目の正午に設定したからである。この理由は主に 2 つある。1 つ目は、例年、立論提出の期限を設けなかったため、多くのチームが 3 日目（大会前日）の夜遅くまで（チームによっては徹夜で）立論作成の作業を行っており疲労が蓄積していたこと。2 つ目は、その結果、立論作成に多くの時間を割き、ディベートにおいて重要な要素である反論やまとめの練習に用いる時間が少なかったことである。立論提出の締め切りを早めに設定することで、残りの時間をディベートの重要な要素である反論やまとめの練習に用いることを意図した。

3 日目は、午前中にモデルディベートを行い、ディベート経験者の日本人学生 2 人と引率教員 2 名が本講座で使用した論題である「日本は原子力発電所を全て廃止すべきである。是か非か。」を用いてディベートを行った。参加者にはフローシートを配布してメモを取る練習をしてもらい、ディベートの後には、数人の学生に自らの判定とその理由について発表してもらった。最後に、講師がディベートの内容について全体的な解説を行った。立論提出の期限である正午に各チームが立論を提出した後は、それぞれのチームがチーム内で肯定と否定に分かれて反論の練習を行ったり、異なるチーム間で練習試合を行うなどして、4 日目

---

<sup>1</sup> それぞれの施設の概要については以下の HP を参照されたい。  
九重共同研修所：<https://kokonoe.student.kyushu-u.ac.jp/kenshusho/>  
山の家：<https://kokonoe.student.kyushu-u.ac.jp/yamanoie/>

の大会に備えていた。なお、練習試合等を通して立論を修正する必要性が生じた場合は、軽微な立論の修正については可能とした。立論は全ての学生が閲覧可能な状態でクラウド上において共有した。これは、他のチームの立論を閲覧して反論を考えたり（なお、この段階では 4 日目の試合の組み合わせは発表されていないので、4 日目の試合でどのチームと対戦するかは分かっていない）、自分たちの立論をブラッシュアップすることを意図していた。

4 日目は、朝から予選 3 試合を行い、肯定側と否定側を少なくとも 1 回ずつ行った。それぞれの試合でジャッジから口頭での勝敗の発表及びフィードバックも行った。予選 3 試合の結果、勝数とスピーカーポイントで選ばれた上位 2 チームで決勝戦を行い、その他の学生は決勝戦を見ながらフローシートを作成し、判定を出した。大会の後はバーベキュー、その後大会お疲れさま会として台湾から参加した学生が企画した Kahoot!<sup>2</sup>を行った。

最終日である 5 日目は午前中に閉会式を行い、4 日目の試合におけるスピーカースコアに基づく個人表彰及び決勝戦の結果を発表した。その後、貸し切りバスで博多駅に戻り本講座の全日程が終了した。その後は、自由参加の懇親会を行い、半数以上の学生が参加した。

表 2. 2024 年の本講座のスケジュール

| 1 日目  |       | 3 日目  |          | 5 日目  |       |
|-------|-------|-------|----------|-------|-------|
| 10:00 | 博多出発  | 07:30 | 朝食       | 10:00 | 閉会式   |
| 15:00 | 山の家到着 | 09:00 | モデルディベート | 12:00 | 山の家出発 |
| 15:30 | 開会式   | 11:00 | グループ作業   | 12:30 | 観光    |
| 15:40 | 講義 1  | 12:00 | 昼食       | 17:00 | 博多到着  |
| 17:30 | 夕食    | 13:00 | グループ作業   | 18:00 | 懇親会   |
| 19:00 | 講義 2  | 17:30 | 夕食       |       |       |
| 21:00 | 終了    | 19:00 | グループ作業   |       |       |
|       |       | 21:00 | 終了       |       |       |

  

| 2 日目  |        | 4 日目  |      |
|-------|--------|-------|------|
| 07:30 | 朝食     | 07:30 | 朝食   |
| 09:00 | 講義 3   | 09:30 | 予選 1 |
| 11:00 | グループ作業 | 11:00 | 予選 2 |
| 12:00 | 昼食     | 12:30 | 昼食   |
| 13:00 | グループ作業 | 13:30 | 予選 3 |
| 14:30 | 講義 4   | 15:30 | 決勝   |
| 16:00 | グループ作業 | 17:30 | BBQ  |

<sup>2</sup> 多肢選択問題を用いた学習ゲームであり、一定時間（10 秒前後）の間に問題に対する回答を選択し、最後に正答率に応じたランキングが表示される。本講座では、台湾の文化や地理に関する問題について、各参加者が自らのスマートフォンを用いて回答を行った。

|       |          |       |     |
|-------|----------|-------|-----|
| 17:30 | BBQ・交流活動 | 20:00 | 慰労会 |
| 21:00 | 終了       | 21:00 | 終了  |

### 3. 本講座への反応及び期待

前述のように本講座は、日本、韓国、中国、台湾など複数の国から学生が参加して開催されている。本章では、2024 年に実施した本講座における学生のアンケート結果を分析することに加えて、講師、各国・地域からの引率教員から見た本講座の意義について述べる。なお、アンケートは日本語で記述をしてもらったため、一部文法等が不自然な記述があるものの、全て原文のまま掲載している。アンケートは合宿の最終日に実施し、研究目的で感想を使用する可能性があることを参加者に周知し、同意した場合に回答をしてもらった。アンケートは、出身の国・地域と感想のみを収集し、匿名で実施した。また、本研究の実施は、九州大学大学院言語文化研究院倫理委員会によって 2024 年 5 月 7 日に承認されている。

#### 3.1. 学生からのアンケート結果

学生から自由記述で合宿全体について感想を書いてもらったところ、ほぼ全員が合宿に満足した内容を記載していた。内容について日本語学習者と日本語話者の 2 つに分けて分析を行う。

日本語学習者については、他の学生との国際交流が楽しかったという感想と日本語の能力をもっと高めたい、という感想が見られた。まず国際交流の側面に関しては、グループワークの時間や講義が終わった後の夜の時間帯で交流を深めたことが楽しかった、という記述がみられた。

##### (感想 1)

交流活動についてですが、個人的に一番好きだったのは「山の家」での自由な時間に、各国の人たちと気軽にしゃべりできたことです。毎日それで少し寝不足になってしまいましたが、こうして他の人と出会い、交流できたのは本当に素晴らしいことだと思います。

##### (感想 2)

ほん～とうに楽しかったです！皆んなで夜遅くまでお酒飲んだり写真撮ったり沢山遊べました。ディベートの試合、国際交流（または旅行）を目的として来たにも関わらず深く仲良くなって友達になれたことが一番良かったことです。

このように、ディベートだけでなく、異なる文化圏の学生と交流することが印象に残っていることが分かる。これは寝食を共にする合宿形式であるからこそ実現できることであり、本講座を山の家において合宿形式で行っていることのメリットの一つである。

次に、外国語である日本語で行うディベートは難しかったため、もっと日本語が上手になりたい、という記述が見られた。

(感想 3)

今回のディベート講座はとても楽しかったです。たくさんの友達ができ、グループでの議論中に発言したいことがたくさんありました。しかし、私の日本語能力があまり良くないため、どう表現すればいいかわからず悔しい思いをしました。もし次回も参加する機会があれば、その時には皆さんともっと流暢に議論できるようになりたいです。

(感想 4)

いい経験をするようになって良かったんです！日本語の実力を伸ばして次はもっと上手になりたいです

(感想 5)

この 4 日間は本当にきついと思いますが、いろんな素敵な人と出会ってよかったなっていうのも感じました。たくさんコミュニケーションをしてもらってありがたいです。もし自分がもっとディベートの才能とか日本語能力を持ったら多分もっといい結果や体験になるかなって思ってますごく悔しいけど、もう精一杯頑張りますからそれでいいと思います。

日本語でディベートをもっと上手にできるようになるために日本語能力を高めたいという感想は、第二言語を学ぶ上での L2 理想自己 (Dörnyei, 2005) を獲得した状態と言える。Dörnyei によれば、L2 理想自己は第二言語を学ぶ上でのモチベーションを高める上で重要な要素であり、ビジョンが明確であるほど第二言語を使うことに対するモチベーションが高まるという研究も見られる (Munezane, 2015)。学習者が明確なビジョンを描くための方法は、留学 (Fukui & Yashima, 2021; Sasaki, 2007) などが主に指摘されているが、ディベートもそのための有力な手法であると考えられ、第二言語習得のために有効である可能性が示唆された。

次に日本語話者については、国際交流ができてよかったというポジティブな意見と、自分がチームを引っ張っていかなければならないというプレッシャーを感じたという意見が見られた。

(感想 6)

合宿が始まって 1、2 日目

→初めてのディベートで、チームの中での日本語話者が自分しかいない、ということに負担を感じた。ディベート経験者のチームには日本語話者 1 人、ディベート初めての人のチームでは 2 人日本人を入れるなど工夫が必要だと感じた。初めてのディベートということと、チームメイトの日本語学習者を引っ張らないといけないという責任が大きい。

3 日目以降

→仲良くなった（打ち解けた）ことでチーム内で協力すること、本番に向けて準備をすることに充実度が上がって行った。

本番（ディベート大会）後

→達成感があつたし、色々立論作りながら悩んだりしたけど、結果満足のいくディベートができて良かった。

（感想 7）

一つ言えるのは経験者と未経験者になるべく均等にして欲しいです。私の班は未経験者しかいませんでしたが、日本語話者が 2 人いるところに経験者もいるという、準備の段階で差が生まれてしまうような班構成になってしまっているのではないかと思います。ですが総合的にみてとても充実したものとなりました。来年もぜひ参加したいです。

日本語話者、その中でもディベート経験者の参加者数が限られる中、彼らをどのようにチームに分けるかを考えるのは難しい点である。例年、事前の説明会でどの程度積極的に交流をしようとしているかを観察したり、各国・地域の引率教員からそれぞれが引率する学生の様子を聞き取ったりして総合的にチーム分けを決定している。しかしながら、ディベート未経験者が他のチームメイトを引っ張るなど思わぬ活躍を見せたり、教員が想定した以上にディベートやグループワークに馴染めない学生がいたりと不確定な要素が多いことも事実であり、チーム分けは毎年頭を悩ませる問題の一つである。さらに今年は直前で体調不良等により学生のキャンセルが複数件発生したため、合宿直前にチーム分けを変更せざるを得なかった。このような不確定要素が多い中で、最適なチーム分けについては今後も検討を進める必要がある。

全体的に見ると、本講座の学生からの満足度は高く、開始当初は不安を感じていた学生もチームメイトと協力しながらグループワークを進めることで、多くの学生が最終的には本講座に満足していることが分かる。

### 3.2. 講師、引率教員からの視点

本節では、本講座に参加した講師及び各国・地域からの引率教員から見た本講座に対する期待や課題等について自由に記述する。

#### 3.2.1. 講師（上土井）

本講座の最大の意義は、日本語学習者と日本語話者がともにディベートを通して国際交流を行うという日本国内においても類を見ない体験を提供していることにある。単にディベートを学ぶだけでなく、異なる国・地域の学生が交流することも重要な点であることから、本講座の講義はグループワークを中心に設計した。講師がディベートの基礎的な内容（ディベートの判定の出し方、立論の作り方など）について説明を行った後、関連した練習問題をグループ内で考えてもらい、代表者に発表してもらった。グループワークを行った理由は大

きく 2 点あり、1 つは講師の説明で理解が不十分であった点をグループ内の日本語話者に聞くことで理解を促進すること。この点に関しては、事前に各チームに少なくとも 1 人配置した日本語話者にサポートを依頼し、周りの日本語学習者で理解が追いついていない学生がいる場合は補足の説明を行ってもらった。2 点目として、グループ内で話し合う時間をなるべく確保することで同じグループの学生と早めに打ち解けることを目指した。本講座は初めて顔を合わせる学生と 4 泊 5 日（最終日は閉会式なので実質的に 4 日）の日程の中で立論を作成し、ディベートにおける役割を分担し、ディベートの試合を行うというタイトなスケジュールであり、チーム内での信頼関係をなるべく早く築くことが重要であった。

講義は 2 日目までに全て完了し、残りの時間は主に 4 日目に行われるディベート大会への準備をチームで行った。活動はチームの自主性を考慮し、「準備で困った点があれば声をかけてください」とアナウンスを行った他はそれぞれのチームがそれぞれの方法で立論の作成や反駁の練習を実施していた。講師はチームの準備状況を定期的に見回り、準備が進んでいないチームについては適宜助言をした他、あるチームからは練習試合の審判を依頼され、試合の判定及びフィードバックを行った。全体として、日本語話者やディベート経験者を中心にチーム内で準備が出来ており、立論の内容について論理の組み立て方や証拠資料の探し方を助言することはあったものの、学生が中心となって学ぶアクティブラーニングが理想的な形で実現できていると感じた。

### 3.2.2. 引率教員 1（諏訪）

韓国は第 1 回から本講座に参加しており、直近の 3 回では 2 大学 3 名（2024 年）、3 大学 11 名（2023 年）、3 大学 11 名（2022 年※オンライン）が参加した。本講座が始まった 2012 年、時を同じくして、韓国では日本語を学ぶ大学生を対象としたディベート大会（韓国大学生日本語ディベート大会）が始まったこともあり、韓国内でのディベート大会参加を考えている学生を主な対象として募集してきた。そのため、参加動機としては「ディベートスキルの向上」が多く、続いて「他の国の人と議論したい」といった声も多く聞かれた。一方、参加後の感想を聞いてみると、「ディベートスキルの向上」よりも「他の国の人との交流」を真っ先に挙げる参加者が多い。韓国内でも日本の大学生との国際交流プログラムが多くある中で、韓国からの参加者にとって本講座は、参加者間での親密な人間関係の構築であり、日本だけではなく中国、台湾といった普段日本語を勉強しているだけでは滅多に会えない日本語学習者との交流が最大の魅力であるようだ。日本語のさらなる学習動機にも繋がっている。これは日中台韓といった多様な地域の日本語学習者が集まり、4 泊 5 日寝食を共にするプログラムであるが故であろう。勿論、ディベートのスキル向上にもつながっている。本講座に参加した学生たちの多くは、本講座で学んだディベートスキルを活かし、韓国での日本語ディベート大会で好成績を残している。このように本講座でディベートを学び、楽しみ、それが韓国での大会参加への原動力となることは、両イベントに関わる者として当初から目指していたことであり非常に満足している。

ただし、課題もある。一番大きな課題は、参加大学の拡大である。韓国での大会に 10～

16 大学が参加していることを考えると本講座への参加校数は非常に少ない。参加費や日程といった問題は多少あるかもしれないが、それよりも本講座の広報の仕方、つまり「見せ方」を改善していく必要性を感じている。韓国で日本語を学ぶ学生たちにとっても、ディベートは「難しい」「怖い」「固い」といった印象は根強い。「わざわざお金を出して日本まで行き、ディベートをする」と思われるようでは難しい。参加したら分かってもらえた本講座の魅力を、参加しなくても分かってもらえるように広報の仕方を工夫し、より多くの韓国人日本語学習者に参加してもらえるようにしていきたい。

### 3.2.3. 引率教員 2（上條）

本講座には、当校の学生が第 1 回から参加しており、今回は 8 名の台湾人学生を引率した。当校には日本語を専門に学ぶ学科がなく、参加学生は第二外国語として日本語を学んでいる点が他の参加者とは異なる。講座への参加には高い日本語能力が求められるため、いくつか工夫をしている。当初は、独自に講座参加者を対象に出発前セミナーを実施していたが、参加者が決まるのが 5 月末であるうえ、期末試験や夏休みが重なることから、日本出発前に参加者を集めることが難しく、ディベートの基礎知識がないまま参加する学生も少なくなかった。本講座は 3 日間の準備期間の後、4 日目にディベート体験を行うというタイトなスケジュールのため、日本語能力やディベートに対する理解が不足していると、チームメンバーと議論を構築するのが難しく、教育的観点からも効果が薄くなってしまった。また、参加学生のストレスも大きく、講座の達成感を得られることなく終了してしまったケースもある。せっかく日本に渡り、時間と費用をかけて参加する講座なので、実りが多く、満足度の高いものにする必要があると考えた。

その解決策として、講座の半年前に日本からディベートの専門家を招き、台湾で「ディベートキャンプ」<sup>3</sup>を開催している。5 回のオンライン講座と 4 日間の対面講座を通じて、ディベート未経験者が最終日にディベートの体験試合を行うことを目標としたプログラムである。今回の参加者のうち 5 名が「ディベートキャンプ」の参加者である。日本語でのディベートを一度経験しておくことで、本講座の内容がイメージしやすくなり、自身の目標が明確になったほか、日本語でディベートを行うプレッシャーも軽減される。これにより、余裕ができた分、交流活動や合宿中の国際交流に時間とエネルギーを注げているように見受けられ、楽しみながら、学びの場になっている。プログラムの目標であるディベート体験という目標に向けて、メンバー間のコミュニケーションが促進され、非日常的な環境での共同生活や集中したグループ作業を通じて、メンバー同士の絆も深まった。日本で「合宿形式」で行われる本講座は、台湾で日本語を学ぶ学生にとって非常に貴重な体験となっている。

### 3.2.4. 引率教員 3（張）

2018 年に中国教育部高等教育指導委員会（日本の文部科学省に相当する機関）が公表した「四年生大学各専攻教育の国家標準」（中国語は《普通高等学校本科专业类教学质量国家标准》（以下、「国家標準」）内で、批判的思考力の育成が外国語学科の育成すべき能力の

<sup>3</sup> 2024 年 1 月～2 月に開催され、日本人学生 12 人、台湾人学生 24 人が参加した。

一つとして挙げられたことをきっかけに、近年中国の外国語教育において批判的思考力の教育がますます重要視されるようになってきている。日本語ディベートは、批判的思考力を養う方法としてよく取り上げられる。国家標準には「日本語スピーチとディベート」が初めて中核科目<sup>4</sup>として設定されているが、筆者が 2023 年に、全国の 157 名の大学日本語教師を対象に実施した調査<sup>5</sup>によると、66 名の教師がそのような授業を設置していないことが分かった。

惠州学院ではこれまで「日本語スピーチとディベート」の授業が設置されていたものの、実際にはスピーチのみが教えられていた。筆者が 2021 年に就職してからスピーチとディベートの両方を教えるようになった。しかし、授業ではディベートの基本知識を教え、試合をある程度実践させているものの、学生の日本語能力の問題<sup>6</sup>や国内でディベートに関する試合や活動が非常に限られていることなどから、学生の関心を引くのが難しいと感じている。

本講座は、中国の学生にとって日本語ディベートを楽しみながら体験できる良い機会だと考えられる。普段、授業でディベートを行う際、学生同士で中国語を使ってしまうことが多いが、この講座では 5 日間、常に日本語を使い、異なる国や地域の参加者と意見交換ができるため、日本語で考える力が養われるだろう。また、大会形式でディベートに参加することで、チームメンバー同士が全力で準備に取り組み、より一層批判的思考力を育てることができると考えられる。今後もこの講座が継続されることを期待している。

#### 4. 九州大学における正課科目との関係（井上）

本講座は、九州大学においては井上が所属する言語文化研究院が共催する「イベント」であるとともに、様々な方法で正課の科目として位置づけたり、講座参加の実績を基に単位を認定したりする方法を模索してきた。また、課外活動である QDC（九州大学ディベートクラブ）の「夏合宿」と位置付けられる時期もあった。ディベート、特に資料調査を基にブリーフと呼ばれる原稿を多数準備し、練習試合を重ねるディベートをそのまま正課の科目とすることは、学生の時間的負担の面から難しい場合が多い。そのため、日本の大学では主に課外活動のクラブやサークルが活動の中心であった。同様に日本における英語ディベートの多くは ESS を母体とする課外活動である。アメリカにおいては、コミュニケーション学部などの全面的な支援の下、ディベート部の監督（Director of Debate）が雇用され、単位認定を行う科目が開講されていることが多い。そのような運営方法による教育活動は「準正課活動」（Co-curricular activity）と呼ばれている（金木・関沢, 2020）。

<sup>4</sup> 「国家標準」では 14 の中核科目が定められ、原則としてすべての大学がこれらの科目を提供しなければならない。

<sup>5</sup> これらの教師は中国全国 19 の省、2 つの自治区と 3 つの直轄市の様々なレベルの大学に所属している。

<sup>6</sup> 「国家標準」によれば、日本語ディベートの授業は基本的に 2 年生の後期か 3 年生の前期に提供することになっている。惠州学院ではディベートの授業は 2 年生の後期から始まるため、日本語をゼロから学び始める大学生にとっては、ディベートは難しいと考えられる。

講座と科目の関係は一律ではなく、科目名も多様であった。講座発足当初、学内で「全学教育関連事業等の実施」を目的として「全学教育改善・実施経費」を申請し、開催費用の一部に充当した。2 年目の 2013 年には同じ経費によって海外からの参加者の旅費の一部を負担している。その後も科研費を含む様々な大学内外の資金を利用してきた。単位認定においては、当初はディベートの関連科目として「議論法とディベート入門」<sup>7</sup>、「競技ディベート実践」、「少人数セミナー（九州大学ディベート倶楽部）」を開講していたが、直接合宿参加を基に単位認定は行っていなかった。2014 年からは、全学教育（後に「基幹教育」）において種々の科目を開講し、単位認定を行ってきた。いずれも全学部生を対象とする 2 単位の選択科目である。科目は合宿講座（事前学習は事後レポートを含む）に特化した「国際日本語ディベート講座合宿」（2014 年）と、より広くディベート活動を提供しその一部に合宿講座を含める「九州大学ディベート・スピーチ プロジェクト」（2021 年）がある。その他では、2018 年に発足した共創学部の専門科目である「議論と創造のコミュニケーション B」（夏クォータ 1 単位）において、通常の授業による履修とは別に、本講座に参加することによって単位取得する方法を選択肢として提示した年があった。この科目は、2022 年度入学者以降の新カリキュラムでは消滅し、2024 年が「旧カリキュラム」在籍者向け開講の最後となった。また、留学生を対象とする日本語科目として開講したり、留学生と日本の学生が協働学習を行う科目として開講すること、海外の大学と合同開講を行う科目として設定することなど、いくつかの大学の関係教員と協議を行ったが、いずれも実現には至っていない。

## 5. 本講座の課題と展望

本章では、本講座を実施するにあたって生じている課題と今後の展望について述べる。まず課題に関しては、参加者の確保と参加費の二点が挙げられる。

参加者の確保に関する課題は、特に日本語話者に関して深刻である。日本語ディベート人口の減少もあり、毎年参加者の確保に苦労しているのが現状である。「4. 九州大学における正課科目との関係（井上）」でも言及しているように、九州大学にはかつては日本語ディベートを行う部活である九州大学ディベートクラブがあり、本講座もその部活の学生を中心に運営されていた。しかしながら、九州ディベートクラブは 2018 年ごろから活動を停止しており、高校で日本語ディベートを行っていた学生が入学しても、大学で日本語ディベートを続ける枠組みがないのが現状である。このため、昨今は九州大学以外からも本講座に参加者を募っており、ディベート経験者ではなく日本語教師を目指す学生が参加するケースが増えている。日本語教師を目指す学生からすると、本講座でグループワーク等を通して実際に日本語学習者に日本語でディベートを教える（一緒に考える）ことは充実した経験になる可能性が高い。

<sup>7</sup> [https://ku-portal.kyushu-u.ac.jp/campusweb/slbssbdr.do?value\(risyunen\)=2012&value\(semekikn\)=1&value\(kougicd\)=12543413&value\(crclumcd\)=](https://ku-portal.kyushu-u.ac.jp/campusweb/slbssbdr.do?value(risyunen)=2012&value(semekikn)=1&value(kougicd)=12543413&value(crclumcd)=)（最終閲覧：2025 年 2 月 27 日） その他の科目についてもシラバストップページ（<https://ku-portal.kyushu-u.ac.jp/>）から検索可能である。

参加費に関しては、九重共同研修所・山の家は大学等が運営する施設であるため、宿泊費や食費等は比較的安価であるが、市街地から離れた場所にあるため交通費（公共交通機関が少ないため、自家用車または貸し切りバスが主な手段となる）が大きな負担となる。昨今の燃料費や人件費の高騰もあり、負担額は年々増加しているのが実情である。本講座も第 1 回、第 2 回は九州大学伊都キャンパスで行っていたように、比較的市街地に近い場所で行えば交通費の負担は少なくなり、一部の日本人学生は通学形式での参加も可能となる。一方で、参加者からの感想にもあったように山の家という市街地から隔離された施設において一緒に宿泊・食事をする事で国際交流が促進されることも事実であり、開催地の選択は一長一短があり、引き続き検討が必要である。

これらの課題を抱えながらも、異なる国・地域から参加者が集い、合宿形式での日本語ディベートの活動を通して国際交流を深めるという本講座は、参加者からの満足度も高く、日本国内ではもちろんのこと、世界的にも希少な活動である。今後もこの活動を継続させ、参加者の満足度や学習効果を最大化するための持続可能な方法について模索を続けていきたい。

#### 謝 辞

2024 年の本講座は、電気通信普及財団の支援を一部受けて実施された。

#### 引用文献

- 井上奈良彦（2012）「ごあいさつ」『国際日本語ディベート講座 2012 プログラム』
- 金木宏心・関沢和泉（2020）「準正課／正課外活動をどのように質保証サイクルへと統合するか」『第 9 回大学情報・機関調査研究集会論文集』 56-61.
- 上條純恵（2017）「ディベートキャンプを振り返る」『ディベートと議論教育：ディベート教育国際研究論集』 1, 20-31.
- 九州大学言語文化研究院（2009）「英語で 生命倫理を考え 討論：九州大学で 6 日間 集中講義形式で ディベートを学ぶ」.
- <https://www.flc.kyushu-u.ac.jp/~inouen/bioethics2009/bioethics2009.html>（最終閲覧：2025 年 2 月 27 日）
- 隅田学・林秀則・坪井敬文・菅谷成子・バージンルース・大橋淳史・中山晃・向平和（2022）「“Ehime University” Science & Culture Camp の開発と参加生徒への影響」『日本科学教育学会研究会研究報告』 32(8), 49-50.
- ディベート教育国際研究会（編）（2015）「シンポジウム：国際日本語ディベート大会の可能性を探る」 井上奈良彦ほか（編著）『ディベート教育の展望』 123-146.
- Dörnyei, Z. (2005). *The psychology of the language learner: Individual differences in second language acquisition*. Routledge.
- Fukui, H., & Yashima, T. (2021). Exploring evolving motivation to learn two languages

- simultaneously in a study-abroad context. *The Modern Language Journal*, 105(1), 267-293.
- Lain, B., & Anderson-Lain, K. (2019). Networking debate and civic engagement: Measuring the impact of high school debate camps. In C. Winkler (ed.), *Networking argument* (pp. 493-498). Routledge.
- Munezane, Y. (2015). Enhancing willingness to communicate: Relative effects of visualization and goal setting. *The Modern Language Journal*, 99(1), 175-191.
- Sasaki, M. (2007). Effects of study-abroad experiences on EFL writers: A multiple-data analysis. *The Modern Language Journal*, 91(4), 602-620.
- Zompetti, J. (2021). Kyushu debate workshops: A rationale for policy debate training. In T. Suzuki, T. Tateyama, T. Kato, & J. Eckstein (Eds.), *Proceedings of the Tokyo Conference on Argumentation*, 6 (pp.194-200). Japan Debate Association.